

牧師室から (2021.7.18) (*この文を書いたのは7月13日です)

梅雨明けはまだみたいで、鬱とおしい雨が続く。雷が鳴りだした。雷が鳴ると梅雨明けも間近だというのが、待ち遠しい。この頃は気温も上がってきて夏らしくなってきた。何か冷たくてさっぱりしたものでも飲んですっきりしたいと思ったら、庭にミントが茂っているのが目に入った。これだと思った。以前パリの街の様子をテレビで見たことがあったが、夏に歩道のテラスで、マンタロー（仏語ミント水：昔の日本の男子の名前のようにあるが）を涼しげに飲んでいた人たちを思い出した。そこで雷が止んでから、庭のミントを摘んで、熱いシロップの中に入れて成分を抽出し、ろ過したものをペットボトルに入れた。教会入口のテーブルで、そのミントシロップを、冷やした炭酸で割って、ミントの葉を浮かべて飲んだらすっきりした。

ミントの主成分はメントールであり、近江兄弟社のメンタームや薄荷味の飴やガム、歯磨き粉などに含まれている。ところがこのメントールというものは、組成が同じでも構造が微妙に違っているものがいくつもある。簡単に言ってしまうと、自分の顔を鏡で見ると、例えば髪の毛の右分けは左分けになるので、実像や写真とは何となく違って見える感じがするように、このメントールも「右型」、「左型」のようなものがある（正確には右旋性、左旋性というのだが）それらの性質も少し異なってくるのである。メントールについては「左型」のものがミントの香りが強く有用なのである。また自然とは不思議なもので、天然には、原理的には左右両方あるはずのものが、なぜか片方しかないものもある（例えば自然界にはブドウ糖は右型しか存在しない）。

とにかくミント（薄荷）には鎮痒・消炎作用や清涼感などがあり、重宝な癒しの植物として昔から知られていたのだろう。それ故に規定されてなくても主への献げ物とされていたようである。ファリサイ派たちがそのようにして自分の信仰を誇示していたのを、イエス様は指摘して、見せかけにこだわらないようにと注意を喚起している。

そのようなことを考えつつ、周りの植物を眺めながらボーっとしていたが、いつか日の長い夏に、パリに行ってマンタローを飲んでみたいなとふと思った。そういえば明日7月14日はパリ祭だ（フランス全土の祭りだけど日本ではそう呼んでいる）。

「それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが。（ルカ 11:42）」

（鈴木淳一牧師）